



月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第3号

発行:レムナントキリスト教会

価格:100円（送料込みで200円）

【目次】

- ◎聖書からのメッセージ:弁解の余地はない
- ◎聖書と文学:太宰治「駆け込み訴え」
- ◎聖書と歴史:福音書の記述は歴史的に正確である
- ◎箴言から学ぼう!:へりくだるなら・・・
- ◎聖書の視点から「死後」について考える:この世の人生と永遠
- ◎キリストを信じた体験談:パンを水の上に投げる
- ◎聖書に関する偉人のことば:カントのことば
- ◎ご案内

<聖書からのメッセージ > 弁解の余地はない

〔聖書箇所〕ローマ人への手紙1:18-20

1:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

1:19 なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。

1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

本日は「弁解の余地はない」として、神さまが我々に対してご自分が存在していることを明らかに示している、ということを見ていきたいと思います。

聖書の神さまについて人に語るとよく反論されることは、「神さまなんか見たことない」「見えないのだから存在しないのでは？」ということばです。たしかに神は目に見えない存在なのですが、しかしだからといって、「絶対存在しない」と言い切ってしまうて良いのでしょうか？本日はこのことを改めて考えてみたいと思うのです。上記テキストを順に見ていきましょう。

1:18というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

神は存在されます。昔の人にとって、それは明々白々な事実だったのですが、現在はもう神はいないことになりました。それは現在の科学が発達して神が存在しないことが証明された、というわけではないのです。そうでなく逆にダーウィンの唱えた進化論などは、現代では大い

弁解の余地はない

に矛盾があることが判明している状況なのです。進化論の現状を言えば、現代の多くの進化論者は、進化論が科学的でなく理屈に合わない理論であることを正直に認めています。

たとえばイヤランゲン大学の進化論者アルバート・フライシュマン教授はこう述べました。

「進化論には重大な欠陥がある。時が経つにつれて、これらの欠陥はいつそう明らかになってきた。もはや実際の科学的知識と一致しないし、事実を明確に把握するにも充分とは言えない」と述べました。

進化論者ダーキー・トンプソン博士は、「**20年にわたる私たちの『種の起源』研究は、予期しない失望的な結果となった……**」と述べています。ですので、多くの人が思い込んでいるほど進化論は科学的でもなく、また人間の存在の理由を明確に説明できるものでもないのです。

しかしそうであっても人々は進化論だの、無神論だのあらゆる屁理屈をこねて、もう神など存在しない、自分の好きなように人生を送れる、と自分の好きな考えを優先しているのに過ぎないのです。しかしそのような真理を阻んだり、屁理屈をこねる行い、すなわち上記の**「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正」**に対して、「**神の怒りが天から啓示されている**」ことをも知りましょう。

1:19 なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。

神はたしかに目に見えない方なのですが、しかしだからといって、神がどういう方かを知る手掛かりをまったく我々に与えていないわけではない、逆に分かるように明らかにしてある、ということがこの聖書のことばの主張です。それはどういう方法なのでしょうか？

1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

「被造物」とは、創造者である神によって創られたもの、具体的には月、星、人をはじめとした自然、動物、植物、鳥、魚などです。聖書に

よれば、これらは皆、神により創造された**「被造物」**です。そしてここでは、神はたしかに目に見えないが、しかし神の能力とか性格とかは、神の創造物である人や動物、植物などを通して明らかに理解できる、そう聖書は語るのです。それはどういうことでしょうか？

たとえば私はミレーという画家の絵が好きです。私は彼に会ったことも話したこともないのですが、しかし彼の作品を見ると、彼の生き方や心情、また、信仰さえもがよく理解できるような気がします。彼の描いた晩鐘やら、落穂拾い、種まく人などの絵を見ると、何も語らなくても彼の持っていた信仰が理解できるような気さえするのです。かくのごとく、一枚の絵、一つの作品でも会ったことのない作者に関して如実に語ります。まして神の作品である地上の人、動物、植物などは、創造者である神御自身に関して明白に語らないのでしょうか？神の創られたものは完全です。人間の作ったものと比べるとさらにこのことがよくわかります。最近日本でアメリカのオスプレイという最新鋭飛行機の配備が大きな関心呼びました。飛行機とヘリコプターの良いところを取ったすぐれた軍用機ということなのです。しかしいかんせん、よく落ちることで有名なのです。ひるがえって神の創られた鳥、たとえばツバメはそんなドジはしません。ツバメは渡り鳥の一種で日本にいるツバメは2,000 kmも離れた遠いフィリピンまで飛んで越冬します。私たちはこれらのツバメなどの被造物のすばらしさを通して、それを創られた神の偉大な力を感じるようになるのです。

1:20 彼らに弁解の余地はないのです。

ですから神は目に見えない、だから神を理解しなくても、その存在を信じなくても仕方がない、という論理に関して聖書はあっさりと**「彼らに弁解の余地はないのです。」**と語ります。そんな屁理屈は通らない、と語るのです。ぜひ正しく真理を見ていきましょう。



よく落ちるオスプレイ

聖書と文学:太宰治「駆け込み訴え」

斜陽、走れメロス、人間失格などの作品で知られ、無頼派として知られる太宰治は今でも人気のある作家です。三鷹の玉川上水で亡くなった彼の命日、6月19日は桃桜忌として知られ、今でも彼を慕うファンがゆかりの禅林寺を訪れます。

彼の文章を読むとき、嫌でも理解できる彼の繊細な心、この世では生きづらかった彼の人生など、同じ思いを持つ人には忘れられない作家となっています。

さて、太宰治と聖書という取り合わせに何か不釣り合いに思う人もいるかもしれませんが、じつは太宰治は、かなり真剣に聖書を読んでいます。聖書に関して彼は以下のように記しています。

「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はっきりと二分されている。マタイ伝二十八章、読み終えるのに、三年かかった。マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ伝の翼を得るは、いつの日か。」

マタイ28章は分量的には決して多いページではないのですが彼はそれを、「**読み終えるのに、三年かかった。**」と語ります。彼がいかに真剣に聖書に、そしてキリストの生涯を描いた福音書に対して向き合ったかがよく分かります。彼のそのような聖書に対する真剣な姿勢や、聖書から読み取った知識が大いに発揮されているのが掲題の作品、「駆け込み訴え」です。

この作品は12弟子の一人、キリストを裏切ったイスカリオテのユダの独白のみで、最初から最後のページまで続くという不思議な作品です。その中でユダは、なぜ自分がキリストを裏切ったのかを切々と語っています。

そのユダの語りはいくつもの福音書の記述をなぞったもので、太宰の深い聖書理解を反映させています。太宰はこの作品の中で、キリストについて、ユダに「あんな美しい人はこの世にいない。私はあの人を純粋に愛している」と語らせています。しかし反面キリストの奇跡やら、神の子であるとのことばに関しては、「あの方は嘘

つきだ。言うこと、言うこと一から十まででたらめだ。私はてんで信じていない」と語らせています。

そしてそれは、そのまま作者である太宰の抱くキリストへの真情を反映させたものにも読み取れます。キリストの弟子は12人もいるのですが、よりによってと言いますか、最後にキリストを裏切り、売り渡したユダ、キリストを信じてはいなかったユダを選び、彼に肩入れした太宰の行動に彼の屈折したキリストへの思いを感じざるを得ません。

彼にとって福音書に見るキリストの生涯は美しく理想的だが、しかし自分の身に当てはめて信じるにはあまりにも遠い存在、縁遠い存在だったのかもしれません。

福音書を読み、大いにキリストに関しての知識を持っていても、しかし彼を信じることはできず、最後には玉川上水に身を投げて悲劇的な最後を迎えた太宰のことを思うと、悲しく空しい思いを禁じえません。

キリストを知識的に知ることは、もちろん悪いことではないのですが、そこに留まるだけでは、私たちに何の救いももたらしません。キリストご自身が以下のように語っています。

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書8:24

8:24 もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」

私たちがキリストを信じたとき、救いを得ることを知りましょう。



太宰治

聖書と歴史:福音書の記述は歴史的に正確である

前回は聖書の記述が歴史的なものであることを見てきました。聖書の記述は歴史の史実に基づいており、歴史や考古学と矛盾していない、ということを見てきました。私たちは現実の世界に住んでいるものであり、空想の世界に生きているわけではありません。したがって、どれほど空想のヒーローが万能で有能でも、それは現実の世界に生きる我々には助けにはならないのです。そのような視点で考えるとき、聖書の大きな特徴はこの本がどこまでも現実に起きた歴史を語る本である、ということに特徴があります。このような視点は他の宗教の経典、たとえば仏教の法華経などとは異なります。法華経にはお釈迦様に関するあらゆる不思議なことや、地湧仏などのことが書いてあります。それはそれで尊いのですが、しかしそれが歴史的に実際に起きたこととは到底思えません。

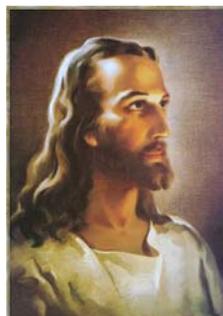
さて、聖書の中でもっとも有名な人物はイエス・キリストですが、このキリストの生涯に関しても聖書はあくまでも歴史的な人物であり、架空の人物ではない、ということに力点を置いていることを知りましょう。キリストの生涯はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人の福音書の記者により記録されています。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは、キリストの12弟子のメンバーです。また、マルコは12使徒のひとりペテロの通訳、ルカは伝道者パウロと行動を共にした医者です。すなわちキリストの非常に身近な人々によって書かれた伝記なのです。

ひとりの人によって書かれた伝記でも価値がありますが、4人もの人により同じ人物に関して伝記が書かれ、しかも相互にほとんど矛盾がないことにより、福音書の記述に信憑性が高いことが分かります。それはたとえてみれば、こういうことでしょうか。同じ事件に関してひとりの人が、「たしかに彼はこの車に乗っていた」と語っても信憑性がありますが、4人もの人が異口同音に同じように証言するなら、さらに大きな信憑性があるものです。さらに同じ災害、たとえば3.11の災害に関して、ひとつの新聞社だけが報道するなら間違える可能性が少しはありますが、4つもの新聞社が、「福島で原発の災害が起きた」と筆を揃えて書けば、まず間違いない事件だと理解できるのです。

イエス・キリストの歴史的な実在についてはどうでしょうか？時々、キリストは伝説の人物だ、などと言う人がいますがどうなのでしょう？じつはキリストの実在は、当時の有名な歴史家たちによって確認されています。聖書にはナザレのイエスが多くの奇跡を行い、ローマ人によって死刑に処せられ、死から甦られたことが書かれています。これらの聖書の記述に関して、多くの古代の歴史家たちは確認を与えています。

たとえば1世紀のローマ時代の歴史家であるコルネリウス・タシタス（A.D.55-120）は、当時の最も正確な歴史家のひとりと考えられています。タシタスの書いたものの抜粋を読むと、ローマ皇帝ネロがクリスチャンをひどい残酷な方法で苦しめたこと、クリスチャンという名前の源であるクリスタス（キリスト）は、ティベリウスの治世に総督のひとりであったポンテオ・ピラトの手によって最も残酷な方法で死刑に処せられたことが分かります。これはまさに聖書の記述と一致しています。

ユダヤ人歴史家であるフラビウス・ヨセフス（A.D.37-100頃）はユダヤの古代に遡ってイエスのことについて書きました。ヨセフスは、**「私たちはイエスが驚くような偉業を達成した賢者であったこと、多くの人たちに教えたこと、ユダヤ人やギリシャ人からも彼に従う者が起こされたこと、メシヤであると信じられたこと、ユダヤ人指導者たちによって告訴され、ピラトによって十字架に付けられ、復活されたことを学ぶことができます。」**と書いています。これらも皆、聖書の記述と全く一致しています。ですので、聖書に書かれたイエス・キリストの生涯は、他の聖書以外の歴史家によっても確認されている歴史的な事実であることが分かるのです。



イエス・キリストの生涯は歴史的に確認されている

箴言から学ぼう！：へりくだるなら・・・

[聖書箇所]箴言 3:34

3:34 あざける者を主はあざけり、へりくだる者には恵みを授ける。

大分前のことですが、ある教会のHPにアクセスした時のことです。ちょうどその週の音声礼拝のメッセージがアップされていたので、聞いてみることにしました。その時にその牧師さんが「皆さんもご存知のように、水は高い位置から低い位置に流れていきます。そんな風に恵みや祝福も、天の父なる神さまから、心の低い人のところに注がれていきます。ですから神さまから恵みを受けたい、祝福を受けたい、と思われているのであれば、まずは心を低くすることです。神さまの前にも、人の前にも謙遜になることが恵みや祝福の秘訣ですよ〜。」なんてことをおっしゃっていました。

冒頭の聖書のことばにも、そのことについて書かれています。「**主(神)はへりくだる者に恵みを授ける**」と。日本語とほぼ同じ意味合いですが、英語訳では、「彼(神)は、低いところに恩恵を与える」と書かれています。そうなんです、先ほどの牧師さんのメッセージと同様、「低い」ということにどうやらポイントがあるようです。もし、私たちがどこまでも心を低くするならば、神さまからの「恩恵」つまり「恵み」や「祝福」にあずかれるのです。すばらしいですよね??

こういう話が良いかどうかは分かりませんが・・・最近あるドキュメント番組でフランチイズの某飲食店のことを取り上げていました。今から数十年前に開業したということですが、そこのお店の理念のひとつに、「常に『感謝』の心を持つ」というものがあるそうです。そして今では多くの店舗数になった、ということをお聞きました。経営者はクリスチャンの方ではないようですが、しかし聖書でも、「感謝」をすることを一面奨励しています。また、「常に感謝」ということですが、これも聖書で言われています。言い方は少し異なりますが、「**すべての事について感謝しなさい**」(新約聖書:第一テサロニケ人への手紙5章18節)とうことばがあります。これは良いことも、そうでないことも、あるいはどんな状況であっても、すべてひっくるめて感謝をする、ということですが、それは己の心を低くして、はじめてできることではないでし

ょうか?クリスチャンではないにしろ、その飲食店の経営者をはじめ、従業員のお一人一人がそういった志を持ち続けて長年お仕事に励んだ結果として、みごとに成功を取めたパターンだと言えると思います。

さて、これはこの世の中のビジネスのことではありますが、私たちの個々における人の歩みも全く同じことが言えると思います。もし、私たちが神さまの前に心を低くするならば、棚からぼたもちが落ちてくるように、恵みや祝福が天からどんどん下ってくるのです。それだけでなく、神さまが共にいてくださるのです。でも、反対に神さまや人々をあざけっていくときに、あるいは神さまや人々に対して少しでも高慢になっていくときに、「**あざける者を主はあざけり**」とありますように、主(神さま)からあざけられてしまうのです。はたまた恵みや祝福を逃してしまうのです。また、神さまが共におられない可能性があるのです。そしてそれだけで終わるのなら良いのですが、「**高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ**」(旧約聖書:箴言16章18節)と書かれていますように、破滅したり、倒れたりしてしまうのです。「破滅」とか「倒れる」ということばに関して、この世においてもそうですが、聖書でも良い意味合いでは使われていませんので要注意です。もし、あざけりや高慢や高ぶりを改めずに、そのまま状態でこの地上の生涯を終えてしまうときに、神さまから悪い意味合いでさばかれてしまう可能性がありますので気を付けていきたいと思います。

繰り返しますが、神さまから恵みや祝福を受けるポイントは、いつもへりくだっていることです。いかなる理由があっても、決して高慢にならないことです。このような論理がそのまま受け入れられるかどうかは分かりませんが、「もしかしたら、そうかも知れないなあ」なんていう風に思われまして、ぜひ実践してみてください。



感謝

聖書の視点から「死後」について考える:この世の人生と永遠

[聖書箇所]詩篇 90:9,10

90:9 まことに、私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせませす。

90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。

この世において、「平均寿命」ということがよく言われます。また、聞いたところによると、我が国日本は世界一の「長寿国」とも言われています。そして詩篇の10節には、「**私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年**」と書かれています。「八十」という数字は日本人の平均寿命と、ほぼ一致します。もちろん個々の人によって寿命は異なるのですが、「**健やかであっても八十年**」とありますように、大体このあたりが目安だということを聖書では言っています。人間的に見れば、あるいは人によっては、「**八十年**」は結構長いように思うかもしれませんが、しかし、「**それは早く過ぎ去り**」とありますように、聖書においては、「**八十年**」であっても、あっという間だと言われているのです。

また、旧約聖書に「ダビデ王」という人物が登場します。彼は長寿を全うした王ではありませんが、しかし彼自身、聖書の中で、「**私の一生は、あなた(神)の前では、ないのも同然です。**」(旧約聖書:詩篇39篇5節)と言っているのです。でも、かつてクリスチャンになったばかりの私には正直、このことばがよく理解できませんでした。「寿命は短いより長いほうがいいのに・・・しかもたしかダビデは長寿を全うしたはずなのに・・・それなのにどうして、『**ないのも同然**』だなんて言ったのだろう？」と。でも、後になってからそのことを少しずつ理解するようになりました。

そのきっかけとなったのは、某教会の牧師さんのメッセージでした。ある礼拝の時のことでした。その牧師さんは、「ねえ皆さん、人生は長いと思うでしょう？でもね、どんなに長生きしたとしても、『永遠の時間』と比べてごらんさい。皆さんのお一人一人の人生はね、たとえて言うならこの部屋の右の窓から鳥が入って

きて、左の窓から出て行くようなものなのです。あっという間の、一瞬のことなのです。でも、後の世、つまり死後の世界は永遠だから、そのことに目を向けていくと良いのです。」ということをお話されていました。

そのメッセージを聞いてから、私の心の思いや価値観が少しずつ変えられていきました。当然私個人としては、一日も長く生きたい！という願いはあるのですが、でも、「**あなたの前では、ないのも同然です**」とありますように、「**あなた**」(神さま)の前には、どんなに長く生きたとしても、「無きに等しい」ということを悟りました。「後の世」つまり「永遠」の事柄に目を注ぐことこそ、もっとも大事なのでは？と思うようになりました。また、先ほど牧師さんがおっしゃっていた「あっという間の、一瞬のことです。」のことばは、詩篇9節、「**私たちは自分の齢をひと息のように終わらせませす**」のことばと、まさに符号するのでは？と思いました。こんなことを言うと、身も蓋も無いような言い方に聞こえてしまうかもしれませんが・・・この世のことはすべて一時的なものなんだなあという風に割り切るように、少しずつ心が変えられていきました。それからは永遠のこと、イエス・キリスト(神さま)のことをひたすら考えるようになりました。

個々の方においてそれぞれの価値観があるとは思いますが・・・しかし、もしよろしければ「この世の人生」と「永遠」について少しでもお考えいただくと幸いです。イエス・キリストは、今日も全世界の人々を「救い」へと招いておられます。



鳥が飛ぶ間のような短い人生

キリストを信じた体験談:パンを水の上に投げる(シャローム)

〔聖書箇所〕伝道の書 11:1

11:1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。

みことばを宣べ伝えることに関して、神さまに祈り、勇気を与えて下さいと前もって祈り備えていくことは大切です。神さまは目に見えませんが、今も生きて働いておられるので祈りが答えられます。

レムナントキリスト教会では、以前から毎月角笛ニュースレターをメール便で800部ほど送っています。さらに最近「月刊バイブル」も発行するよう示され、これはノンクリスチャン(まだクリスチャンでない方)向けに発行しています。

この月刊バイブルを直接会って相手に手渡すこともありますが、また、ポストに投函もしています。以前はキリスト教書店で購入したトラクトを配布したこともありましたが、しかし何か今一つフィットしないこともあり、今回教会の皆で祈って書きあげたのが月刊バイブルです。

教会やクリスチャンの専門用語を極力排して、聖書を読んだことのない人にも理解できること、平均的な日本人の人に分かりやすいものをコンセプトに作ったものが、この月刊バイブルなのです。A4サイズのページに簡単な聖書のメッセージや証を書き、それを印刷して皆で配るようにしています。その配布に携わって私個人は大変喜びを感じています。

人前での評判より、むしろ神からの報いを期待して配るようにしています。配り終えた

後は、ささいなことではありますが、何か達成感があります。月刊バイブルの記事や証が作成されるために多くの祈りを費やしています。また、配布に当たっては、主の助けや導きを与えられるよう細かく祈っています。

聖書には、伝道の書11章1節に、「**あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。**」と書かれています。

ですので、どなたが読まれるか分かりませんが、自分の持っているパン(神のことば)をどなたにも渡せるよう、求めていきたいと願っています。

キリストの語られたことばには、愛ということもあります。そしてそれにとどまらず、裁きに関しても書かれています。それで、私たちはこのどちらの面も語っていきたく願っているのです。キリストの言われる通り、命に至る門は狭い門なのです。

私たちはこんな活動をもう何年も行っているのですが感謝なことには、それが全くの無駄にはならず、少しずつですが分かる方も現れてきています。このような働きに携われることは感謝です。



パンを水の上に投げる

聖書に関する偉人のことば:カントのことば／お知らせコーナー

<聖書と偉人> イマヌエル・カント



カント

聖書の存在は、人類がかつて経験した
うちでもっとも大きい恵みである。その
価値を減らそうとのいかなる企ても、人
類への罪悪となる。

<お知らせコーナー>

●月刊バイブル無料プレゼント！（限定5名様）

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？もし興味があり、購読をご希望の方はお申し込みください。尚、期間限定サービスとして、申し込み順で5名様までに、本紙、送料共に「1年間無料！」で送付することにします。ご希望の方は以下を記載の上、mail:truth216@nifty.com もしくは [fax:020-4623-5255](tel:020-4623-5255) もしくは <tel:042-364-2327> へご連絡ください。先着5名様に郵送でお送りします。

「月刊バイブル無料サービスに申し込みます。」

住所:

名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館 (tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部屋を確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042-364-2327, mail:truth216@nifty.com

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス

<http://remnantnotudoijimdo.com/>

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>